

生命の多様性と永続性と

千葉・幕張で「大恐竜博」を見て

酒井恵三

東京から京葉線に乗り、幕張海浜駅で下りると、真新しい高層ビルが林立するばかりの閑散とした町並みが広がっていた。月曜日だと言うのに、オフィス街である千葉市の幕張副都心は人も少なく、本当にここが「大恐竜博」が開催されている所かと疑った位だった。幕張副都心の建設が、堂本氏と言う女性知事の誕生につながった数年前の千葉県知事選挙の争点の一つになっていた事を思い出していた。

「大恐竜博」の会場となっている幕張メッセへは、ペDESTリアンデッキ（歩行者廻廊歩道橋）を駅からずっと渡って行つた。近未来的な雰囲気は何処となく漂わせている割には、人が殆んどいない、と言うのも以前読んだ小松左京氏や眉村卓氏のSF小説を彷彿とさせた。

実は十数年前に「ジュラシック・パーク」の映画が大ヒットした際、マイケル・クライトン氏の書いた原作を読んだ事があった。その時「恐竜温血説」を知り、興味を覚えた。更に小説の中で登場人物らに襲いかかって来るティラノサウルスやヴェロキラプトルの描写に迫真さを感じ、驚きを禁じ得なかった。それからは、少なくとも金沢周辺で恐竜関係の展覧会が開催されると、見に行くようにしている。実際この十年ばかりの間に恐竜の研究も進み、様々な学説が唱えられるようになったのは大きな収穫だったと思うし、その時の展覧会では、常に最新の学説を反映させていたのは良かったと思う。

英国の科学雑誌「ネイチャー」や購読している「ナショナル・ジオグラフィック」（日本語版）でもよく恐竜関係の特集が組まれ、それを読むと、最新の恐竜研究の息吹が見て取れる。最近よく言われている「鳥類は恐竜の直系の子孫である」と言う学説も、今回の「大恐竜博」にどう反映されているのか、大変興味深い所だった。

「大恐竜博」は日本経済新聞社と「ナショナル・ジオグラフィック」（日本語版）を発行しているのは、日経新聞の子会社である）そして、中国政府が実質的に共同主催しているらしかった。展覧会のスタッフには、実際雲南省の現地で恐竜を発掘している研究者らがあり、拙い中国語（北京語）で彼らと言葉を交わし、話を聞く事によって、或る程度は発掘現場の雰囲気を感じる事が出来た。それだけでも大きな収穫だったと言えるのではない

か。日本の身障者のグループが、わざわざ現地まで見学の為、最近訪問して来たと言う話を聞いた時は正直、驚いたものだった。

恐竜には実に巨大な物が大きい事には、いつも驚かされる。ティラノサウルス程度の物でも実際結構大きいし、展示されているチュアンジェザウルス（草食獣）に至っては体長二十数メートルもあり、好奇心に駆られ、カメラを向けて、その全体像を撮影しようとしても、決してレンズに入り切る事はなく、苦笑してしまった。また先程の「ジュラシック・パーク」の、或る意味「主役」と言っても良いと思う、ヴェロキラプトルの化石も展示されていたが、小説や映画の中ではすばしっこさが強調されているこの恐竜の、往時の勇姿に思いを馳せたものだった。

恐竜の化石を見ると、何故この様に繁栄を極めた生物が滅亡してしまったのか、と言う疑問を誰もが持つと思う。実際、恐竜の絶滅に関しては実に百以上もの学説が提起されており、そのどれもが本当だと言う決定的な証拠もないが、事実ではないと否定する事も出来ないと言うのが、学界の常識となっているようだ。恐らく一つや二つの原因だけではなく、複合的なものだったろう。余りにも巨大化し過ぎた事、地球の気候の変化、そして巨大な隕石が地球に衝突した事……。恐竜の繁栄と滅亡は、我々人類にとっても確かに示唆的である。

しかし、「恐竜は決して絶滅した訳ではない。」と言う考え方も確かにある事を今回の「大恐竜博」で初めて知った。それはどう言う事かと言うと、先にも挙げた「鳥類は恐竜の直系の子孫である」と言う学説が正しければ「恐竜は鳥類に姿を変え、今尚地球上にその活動範囲を広げ、繁栄を続けている」と言う事なのである。事実これは定説となりつつある程、有力な学説なのであるが、「大恐竜博」ではそれを丹念に検証しているのが面白かった。丁度恐竜から鳥類へと進化する途中の過程と思われる生物の化石も展示され、その分野に於ては第一人者とされる中国の徐星教授の解説も添えられており、興味深かった。

会場は当然の事ながら家族連れの姿が多く、一見すると子供向きのイベントのようにも見える。しかしこの日だけは本当に、子供の吸い取り紙のような柔軟な気持ちに戻って、吸収したものも多かった。「大恐竜博」は大変見応えがあり、最新の恐竜に関する学説が反映されたものとなっている。その中でも特に興味を抱いたのはやはり「鳥類は恐竜の、直系の子孫である」と言う説であった。殊にキリスト教やイスラム教といった一神教の宗教では常に終末論が熱く語られ、我々はそれに対し激しく心を動かせられる事も多い。い

つの日には訪れるであろう人類の滅亡に対し、我々は何かしら心の準備をしておかなければならない、と言った考え方もあろう。だが、陸上に棲んでいた哺乳類の仲間が海に帰り、鯨類となってその高い知能によって全海洋上にその活動範囲を広げ、繁栄を極めている事や、美しい人魚のモデルとされる、ジュゴンやマナティが、実は陸上に棲む象の仲間が海に戻ったものである事が最近証明される等、生物は環境の激変があると大胆に自らをメタモルフォーゼ（変異）し、容易くはその生命の営みを終えるものではない、と言うことも記憶しておかなければいけないのではなからうか。まるで近未来を描いたSF小説に出て来る様な殆ど無人の都市である幕張で、（それは或る意味、聖書の黙示録のようですらあった。）生命の多様性や永続性について思いを馳せると言うのも、何だか面白かった。